

# 山形県内の縄文時代前期後半の集落とくらし

菅原哲文

## 1 県内の縄文時代前期後半の集落

### はじめに

山形県内の縄文時代前期後半の集落跡では、大木4式期の高畠町押出遺跡、大木6式期を中心とする寒河江市高瀬山遺跡、日本海側庄内地方の遊佐町吹浦遺跡などが主な事例としてあげられる。縄文前期は、早期には規模も大きくなく移動的であった集落が、規模が拡大し大型住居跡が出現する時期である。前期後半になると、集落を構成する大型住居跡の棟数も増え、後の中期前半にみられるような広場を備えた環状構成の集落が出現するようになる。

ここでは主な県内の縄文前期後半の集落の構成と特色について、また、集落の生業活動や祭祀遺物などについてもあわせて内容を述べたい。

### 押出遺跡の集落跡

押出遺跡は、高畠町大字深沼に位置し、吉野川と屋代川の合流点付近、吉野川によって形成された自然堤防下の泥炭地縁辺部に立地する。周囲には「大谷地」と呼ばれる泥炭の沖積堆積層が発達している。地表下2mから発見された低湿地遺跡であり、縄文前期大木4式期の集落跡である。山形県教育委員会による1～3次調査では、39棟の住居跡とされる遺構と1基の集石遺構が検出された(佐々木ほか1990)。その後、山形県埋蔵文化財センターによる4・5次調査では、盛土された打ち込み柱を伴う遺構について、「盛土遺構」と呼称し、盛土遺構が4基検出されたと報告している(水戸部ほか2014)。その後の調査では、さらに3基の盛土遺構が検出された(図1・水戸部・木村2017)。

押出遺跡で確認された打ち込み柱によるマウンドをもつ遺構について、第1～3次調査報告では平地式の「住居跡」と捉え、規模が長径3～5mの小型のもの、5～7mの規模のもの、8mを超す大型のものがある事、根太状の材による施設を持つものがある事が報告されている(図3)。また、佐藤は2箇所の間地をはさんで3群の遺構群が存在するが、3群は同時存在であり、マウンド状盛床・転ばし根太のあるものもない小型住居の一部が最終段階、残った盛床や根太が無い住居で新旧段階を検討し、3段階の変遷を想定した(図2上・佐藤2009)。一方水戸部は、押出遺跡の盛土や打ち込み柱を持つ遺構群について、住居跡ではなく、杭は土止めの施設であり水場の作業場的な施設を想定している(水戸部ほか2014・水戸部・木村2017)。ここでは集落と捉えるのか作業場と捉えるかどうかは言及しないが、帯水しない隣接地域に主な居住域の存在の有無を含めて遺跡全体の内容を再度検討する必要があると思われる。

### 高瀬山遺跡の集落跡

山形盆地の西側、最上川の左岸の高瀬山丘陵の段丘上に立地する。高瀬山遺跡1期地点

# 特別テーマ展関連講座

—押出遺跡の6次調査と山形県内の縄文前期後半の世界—

講義 6

山形県内の縄文時代前期後半の集落と暮らし

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

菅原 哲文 氏

平成30年7月22日（日）

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

に前期後葉～末葉（大木5・6式期）の集落跡が確認された。平成6年から9年にかけて（財）山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われ、延べ53,850㎡が調査されている（齊藤ほか2004）。前期の遺構の多くは大木6式期である。集落跡は直径約120mの環状を呈する（図4）。大型の長さ15～20mに及ぶ大型住居跡が12棟、3～5mの小・中形の住居跡が37棟検出されている（図5・6）。大型住居跡は放射状に配置されているが、東側と西側に分布のまとまりがあるように推測される。住居と重複、もしくはそのやや内側に土坑群が分布する。土坑群の中には墓壙が含まれる。その内側には遺構が希薄な広場的スペースがある。中型・小型の住居群は集落南側に分布のまとまりをもつ。このような複数の大型住居跡を放射状に配置し、中央に広場を設けるような構成は、縄文時代中期前半に県内で認められる構成である。高瀬山遺跡の場合は、地域の拠点となる集落の構成であるが、その他の中小規模の集落では大型住居跡を伴わないものも存在すると推測される。

### 遊佐町吹浦遺跡の集落

当遺跡は、庄内内平野の北部、遊佐町吹浦に所在し、月光川の河口域に位置する。大正8年（1919）に発見され古くから調査されている遺跡である。昭和26年から28年にかけて四次にわたる発掘調査が実施されている（柏倉他1955）。昭和58年から61年にかけては山形県教育委員会によって4次にわたる発掘調査が実施された（渋谷・佐藤ほか1984、渋谷・佐藤1985、渋谷・黒坂1988）。縄文前期後葉・末葉を中心とする竪穴住居跡48棟・土壙334基が確認された（図7）。竪穴住居跡の形態は長方形を基調とし、3種類の規模がある事が指摘されている。炉跡は地床炉で、1～数基を備える。土壙はフラスコ状土坑が主で、大型のものは深さ2m、底部径2mを超える規模になるものも多い（図8）。住居跡は高瀬山遺跡にみられる長形状の大型住居跡とは様相を異にしている。

住居跡は13カ所の群に分けられ、同じ場所に何回も建て替えされながら長期間にわたって存続していたと考えられる。集落中心部は遺構が希薄であり、「広場」を形成している。

### 川内袋遺跡の集落跡

川内袋遺跡は、新潟の県境に近い鶴岡市五十川に位置する。山形県埋蔵文化財センターにより、平成19年に調査が行われた（齊藤2012）。遺跡は早期末から前期末、中期・後期の遺物が出土しているが、集落の主体は前期後・末葉と考えられる。竪穴住居跡は7棟が検出され、そのうちのST500は長軸が30mに及ぶ大型住居跡である。調査区が道路幅部分に限られているので、集落構成の全体像は不明であるが、大型住居と中小型住居による構成が見られる事、段丘縁辺に住居が構築されている事、フラスコ状土坑などがまとまって分布する領域が見られる事が指摘される。大型住居跡ST500は、複数の炉跡を備え、2本一対の柱穴配置が見られる。床面が3～4面確認された事から長期にわたっての利用が想定される。出土土器には大木式土器が見られるが、他地域からの影響を受けた地域色の強い土器が多く出土している。

## 酒田市飛島の縄文前期集落と日本海側の交流

酒田市沖の飛島には、縄文前期の船見沢遺跡や、前期から中期にかけての蕨山遺跡が調査されている。船見沢遺跡では、前期末の大木6式期の方形の竪穴住居跡が2棟検出された(齊藤1992)。蕨山遺跡では前期初め、前期末の遺物の出土が認められる(齊藤1993)。両遺跡とも出土する縄文土器には、山形で主に見られる大木式土器の他に、北陸系の土器や、北東北の円筒土器が認められ、海沿いを通じて北と南の地域にわたり活発な往来があった事がうかがわれる。また、黒曜石の産地分析の結果、信州産や新潟産と考えられる石材が入っている事が明らかになった(パリノ・サーベイ株式会社1993)。

## 2. 縄文時代前期後半の生業

### 押出遺跡の様相

1990年の報告と、その後の分析において(佐々木ほか1990・富岡2009)動物骨の出土が報告されている。食料として利用されたものと思われる。魚類では、ウグイ属(地方名は「はや」)、サケ科の椎骨が5点出土した。サケやサクラマスに相当する可能性が考えられる。押出遺跡でも秋季に河川を遡上するサケを積極的に利用していた可能性は高いものと思われる。また、集石遺構からは鹿角製ヤスが出土しており、漁具として利用されていたものと考えられる。動物骨では、シカ、イノシシ、鳥類(種類不明)が出土している。シカ、イノシシが最も頻度が多い。他にマルタニシが出土している。

植物性の遺物としては、クリ、クルミの出土が多く、クルミは1~3次調査で約80箱が出土している。植物質の食料としてはこの2つの利用が主であったと推測される。この他、カヤ・ヒメビシ・オニバス・コウホネ・ニワトコ・ヤマボウシ・ブドウ属が出土している(佐々木ほか1990)。第4・5・6次調査ではヤマブドウ・ヤマモモ・ササゲ属アズキ亜種・カラスザンショウ・ジュンサイ・エゴマ・シゾ属などが新たに確認された(水戸部ほか2014、水戸部・木村2017)。

押出遺跡から出土したクッキー状炭化物は、その内容物に動物性のものや植物性のものなどが多様に含まれるものと推測された事もあったが、窒素・炭素安定同位体分析により異なった見解が示された(國木田ほか2009)。分析では、C3植物の範囲でC3堅果類の範囲に含まれる事、動物質の物は含まれていない事が明らかになった。一方、押出遺跡の土器付着物(炭化物)は、C3植物や動物性由来の物が含まれているという結果が得られている。土器による調理では植物質、動物質などの多様な食材を調理していた事に由来するものであろう。

### 吹浦遺跡の様相

吹浦遺跡では、1955年の報告で、洞窟内(土坑と思われる)、A地区、B地区の住居跡とその周辺にヤマトシジミを主とする小貝塚が六ヶ所ほど発見された。この貝塚や周辺の包含層中から食料として持ち込まれた動物遺体が出土している。(長良ほか1955)、爬虫類(イシガメ)、鳥類(サギ科)、哺乳類(イノシシ・ニホンジカ・クジラ類)、貝類では13種類が出土しており、そのうちの多くはヤマトシジミである。ヤマトシジミは海浜に注ぐ砂泥性の河口で多少潮のさす環境に多く棲む。また骨鏃と考えられる骨角器が

出土している。

山形県調査の第2・4次資料では、ヤマトシジミ、ニホンジカ、ヒダリマキマイマイが出土した（渋谷・佐藤 1985、渋谷・黒坂 1988）。

魚類の出土報告が無いが、遺存状況によるか調査精度の問題もあると思われる。

植物質の遺物としては、オニグルミ、クリ、ケヤキ、コナラ、シナの木の一つが出土している（長良ほか 1955）。吹浦遺跡の石器組成では、磨石類が6割近くを占め、狩猟具などよりも優勢である。また、フラスコ状土坑も他遺跡と比べ、規模や数量が卓越している。さかんに堅果類や根菜類を活用していた事がうかがわれる。

### 3. 縄文前期後半の祭祀と遺物

縄文時代前期後半では、縄文時代に一般的に作られていた土偶や石棒といった祭祀遺物が定着してゆく時期となる。

土偶は、女性的な特徴が表現された豊穰や子孫繁栄を願い製作されたと考えられている。県内で確認されている遺跡は他地域よりも遅く、縄文前期初めの上荒谷遺跡が現時点での最も古い事例である（図9上）。その後、前期前葉や中葉にかけて土偶を出土する遺跡はほとんど認められず、押出遺跡でも土偶の出土は報告されていない。

土偶が複数個体まとまって出土しているのは、高瀬山遺跡である（齊藤ほか 2004）。当遺跡の土偶は大木5～6式期になると考えられる。頭部、腕の表現は見られるが、目・鼻などの表現や脚の表現は見られない（図9右下）。また、同時期の吹浦遺跡では土偶は出土しておらず、地域的な要因も関係しているものと思われる。

石製祭祀遺物としては、石棒や異形石器、岩版などがある（図2下・図9）。石棒は男性性器を模した遺物であり子孫繁栄などの意図を込めて製作されたものと推測される。県内では、前期前半の遺跡でも確認されているが、この時期の数量は限定的で普遍的な道具であったのかは疑問である。押出遺跡では小型石棒が出土している。前期後葉・末葉の高瀬山遺跡では、石棒は大型化し、出土数量も増えている。石棒の他に石剣なども認められる。日本海側の吹浦遺跡でも大型の石棒が出土している。川内袋遺跡でも、石棒、石剣が認められ、その他に北東北に主に認められるカツオブシ形石製品が出土している。異形石器は、押出遺跡では極めて出土点数が多く、形態も多様である。

図10に縄文時代前期の耳飾り、石製垂飾品を示した。耳飾りでは塊状耳飾が一般的に見られ、他に管玉や丸玉類がある。その他、斧状の石製品なども伴う。

### 引用・参考文献

長田友也 2009「東北地方における縄文時代前期の儀器と精神文化」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』pp.289-310

柏倉亮吉・江坂輝彌・酒井忠純・酒井忠一・加藤稔 1955『山形県飽海郡吹浦遺跡発掘調査報告』荘内古文化研究会  
國木田大・吉田邦夫・辻誠一郎 2009「押出遺跡のクッキー状炭化物」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』pp.241-250

小林圭一・菅原哲文 2009「押出遺跡と最上川流域の縄文前期集落遺跡」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究

発表資料集』 pp.165-201

齊藤主税 1992 『船見沢遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 177 集

齊藤主税 1993 『蔵山遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 189 集

齊藤主税・須賀井明子 2004 『高瀬山遺跡（1期）第1～4次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集

齊藤主税 2012 『川内袋遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 197 集

佐々木洋治・佐藤庄一・佐藤正俊・長橋至・軽部文雄 1990 『押出遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会

佐藤鎮雄ほか 2007 『押出遺跡』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

佐藤鎮雄ほか 2009 『じょうもん天地人』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

渋谷孝雄・佐藤正俊ほか 1984 『吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第 82 集

渋谷孝雄・佐藤正俊 1985 『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第 93 集

渋谷孝雄・黒坂雅人 1988 『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第 120 集

菅原哲文 2009 「やまがたの前期縄文人のくらし」 『じょうもん天地人』 p121～126 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

富岡直人 2009 「東北地方縄文時代前期の環境変動と生業—山形県出土動物遺存体資料を中心として—」 『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』 pp.133-144

長良信夫・滝庸・江坂輝彌・亘理俊次 1955 「第二節 自然遺物」 『吹浦遺跡』 pp.77-81

パリノ・サーベイ株式会社 1993 「山形県蔵山遺跡・船見沢遺跡・吹浦遺跡から出土した黒曜石の成分分析」 『蔵山遺跡発掘調査報告書』 p.40～p.42

水戸部秀樹ほか 2014 『押出遺跡第4・5次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 212 集

水戸部秀樹・木村恵理 2017 『押出遺跡第6次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 227 集

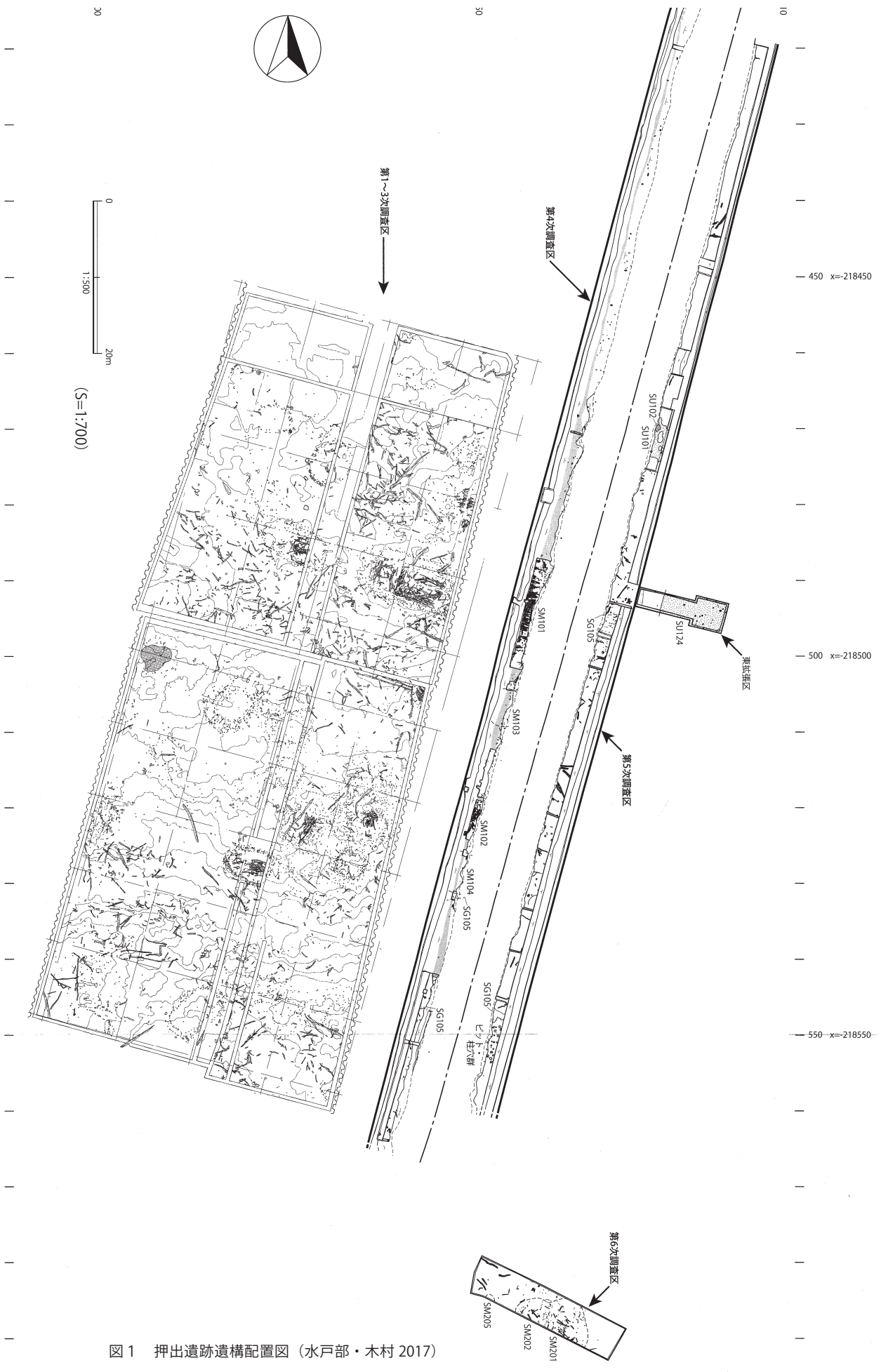
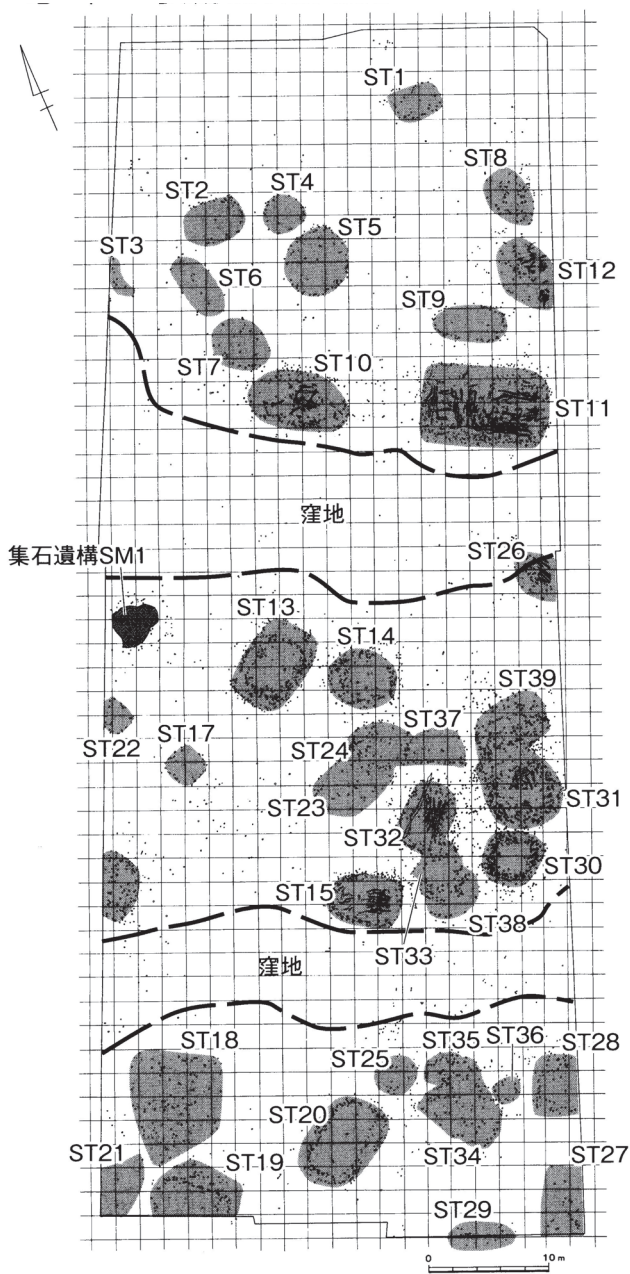
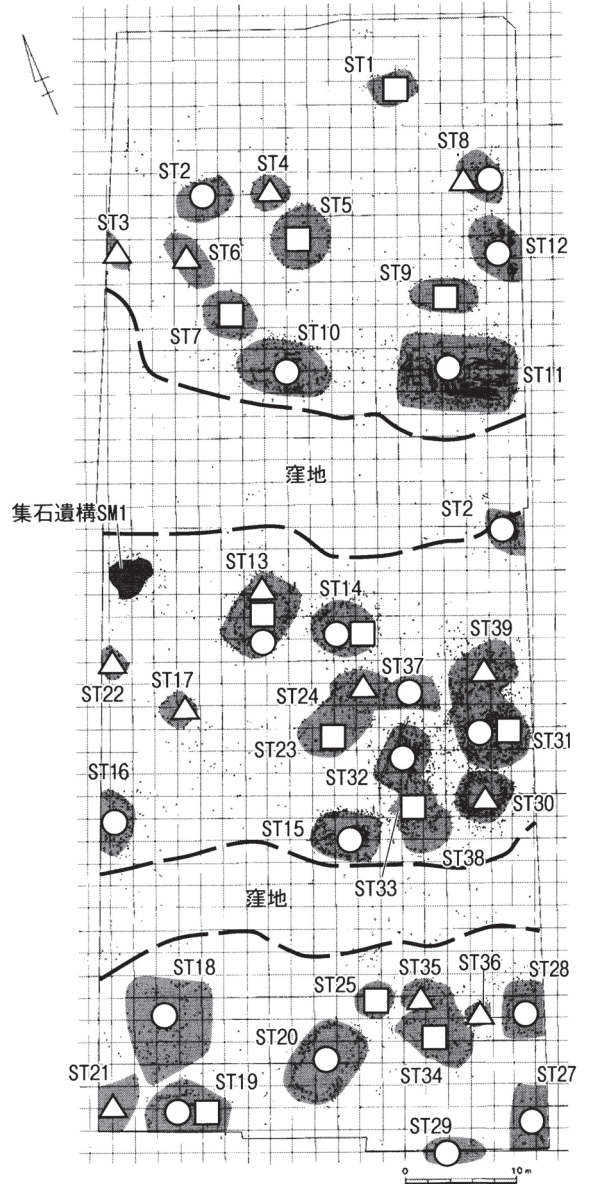


図1 押出遺跡遺構配置図 (水戸部・木村 2017)



押出遺跡遺構分布概要図

△ 第Ⅰ期 □ 第Ⅱ期 ○ 第Ⅲ期



押出遺跡住居跡変遷推定概要図

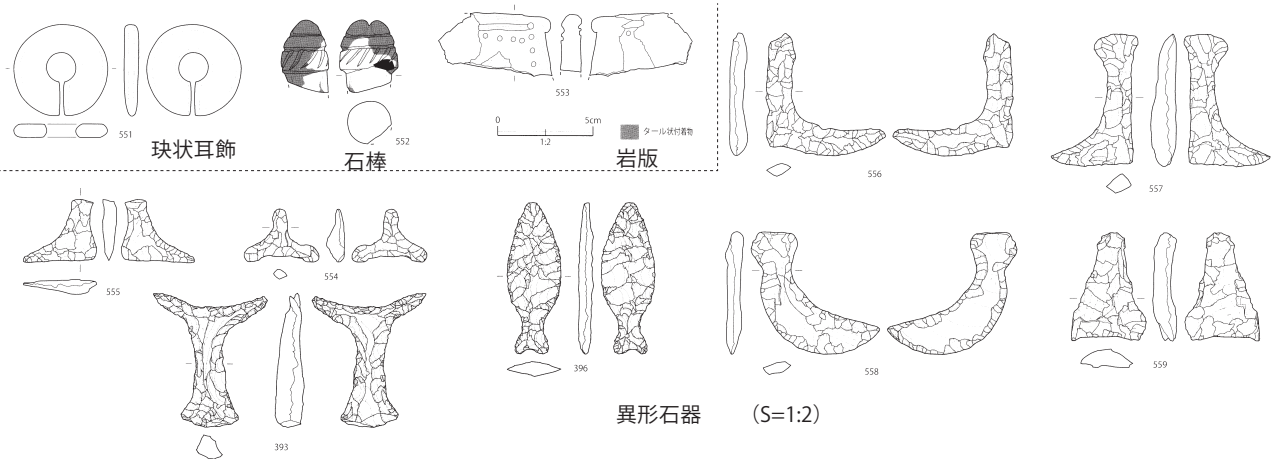
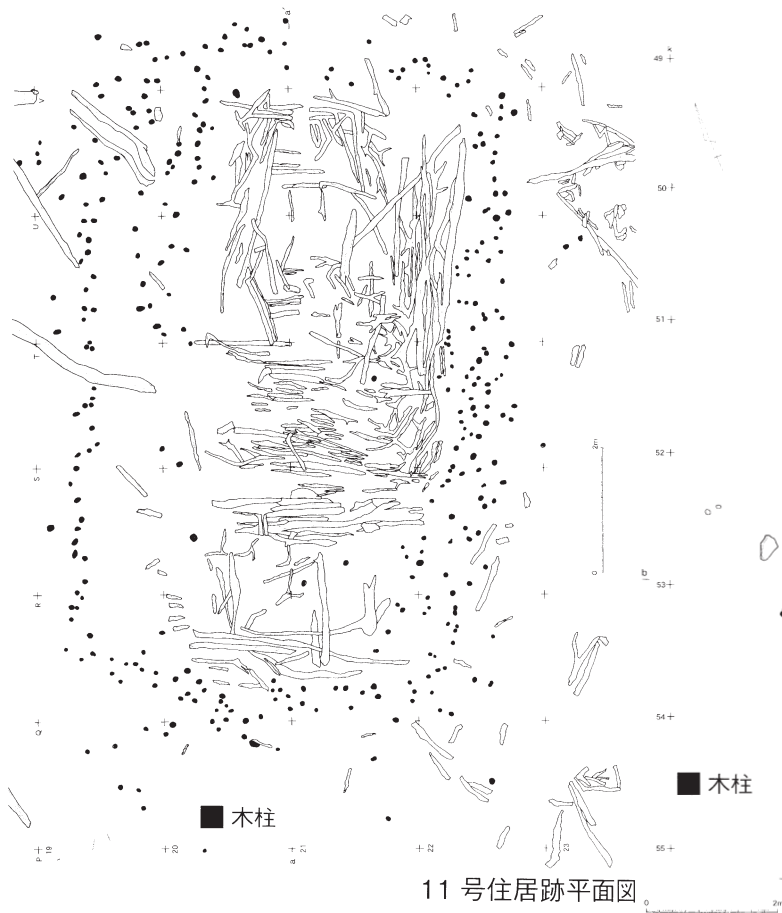
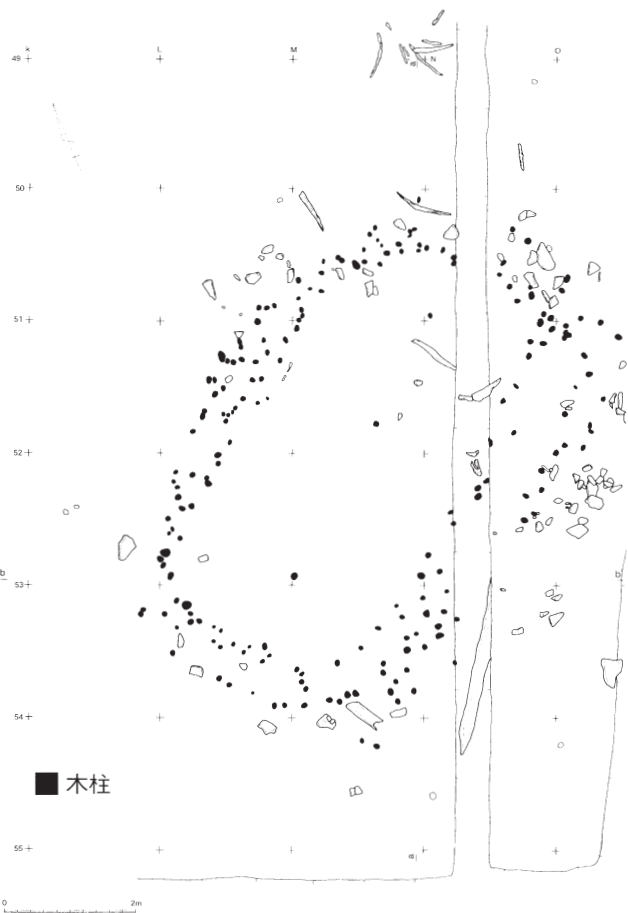


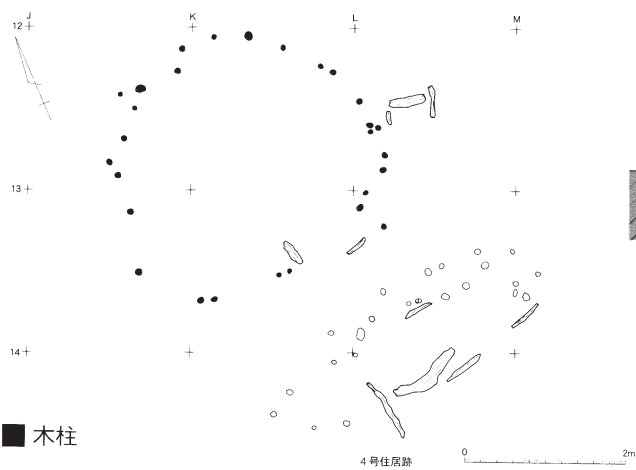
図2 押出遺跡遺構の集落変遷図 (佐藤ほか 2009) ・ 4～6次調査出土祭祀具、装身具 (水戸部ほか 2012、水戸部・木村 2017)



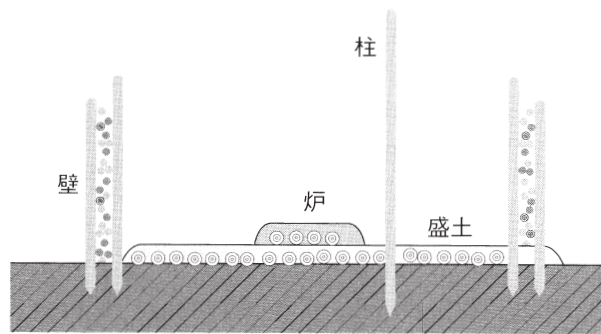
11号住居跡平面図



20号住居跡平面図



4号住居跡



住居跡下部構造模式図

図3 押出遺跡遺構の住居跡 (佐藤ほか 2007)

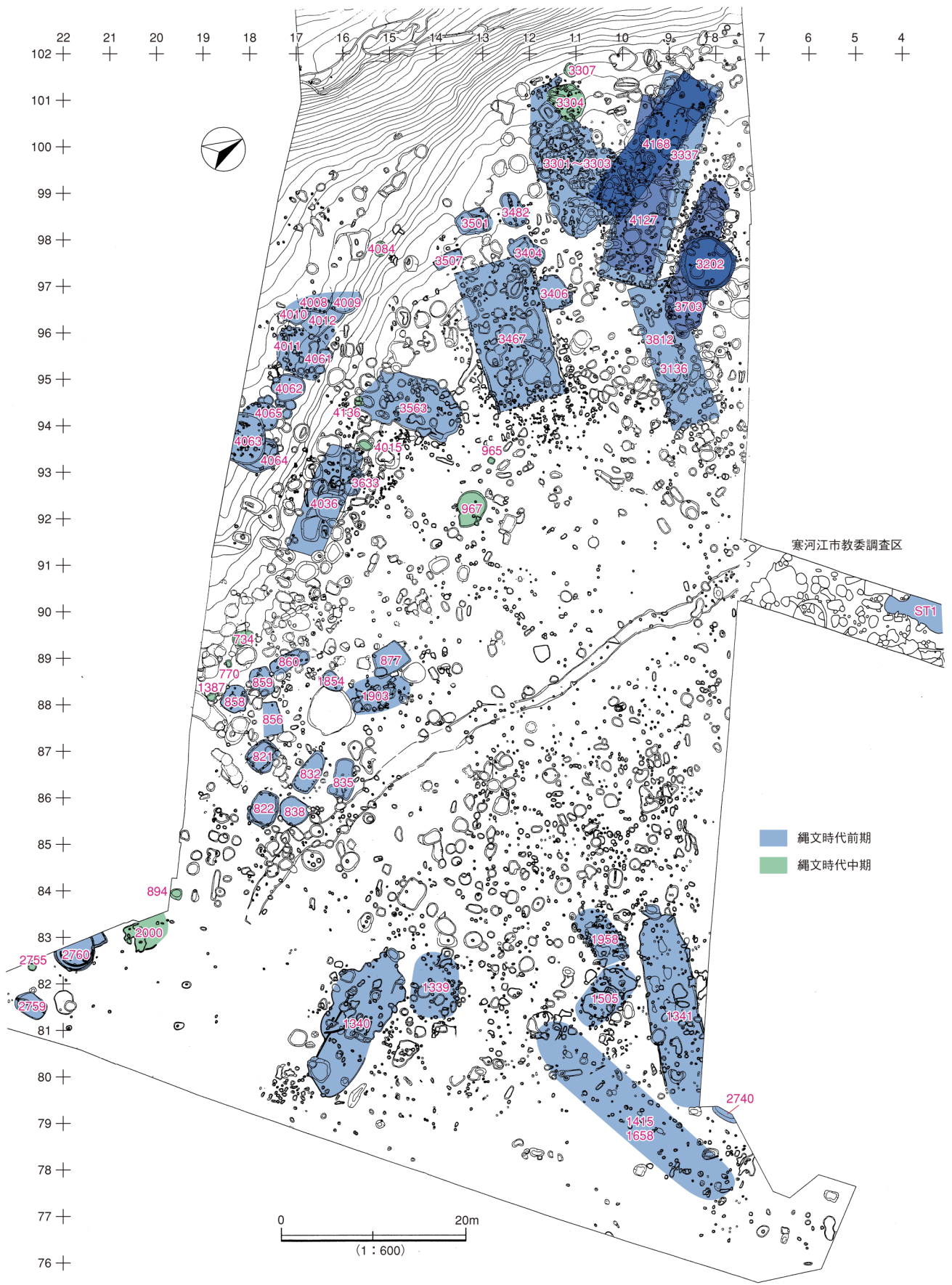
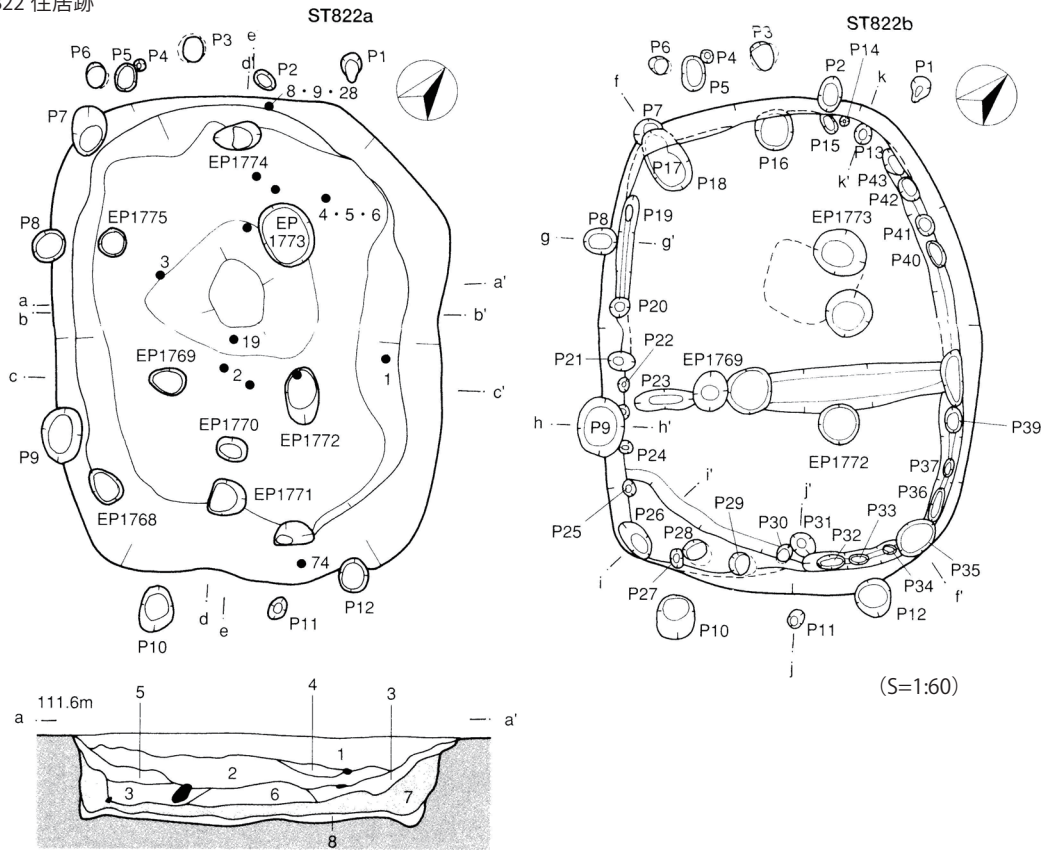


図4 高瀬山遺跡遺構配置図 (齊藤ほか 2004)

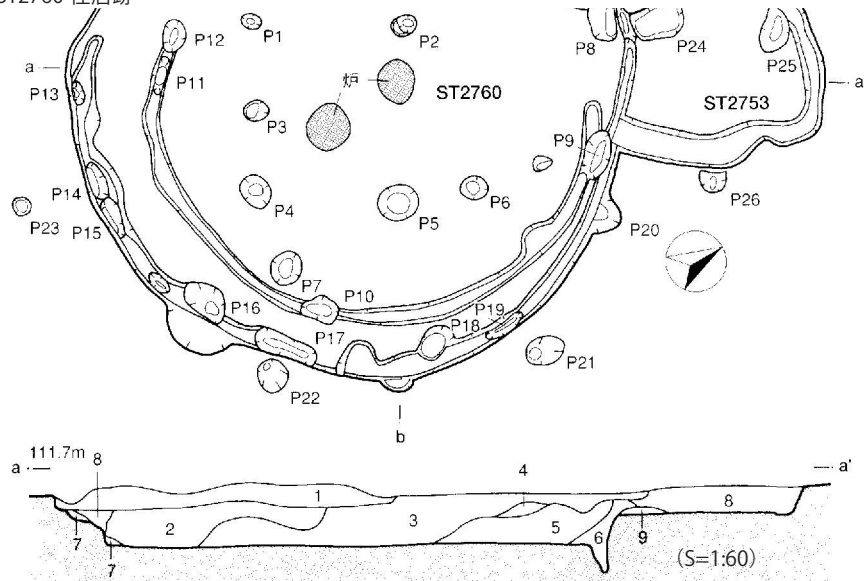


図5 高瀬山遺跡 ST1341 大型住居跡 (齊藤ほか 2004)

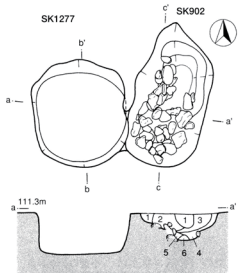
ST822 住居跡



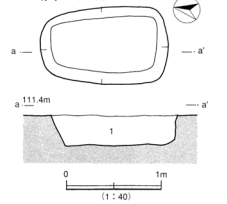
ST2760 住居跡



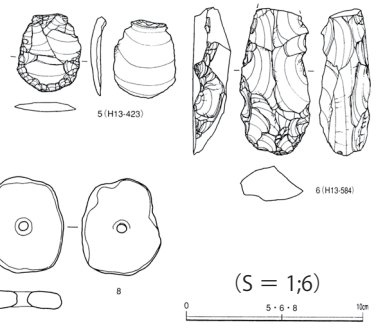
SK902 土壙



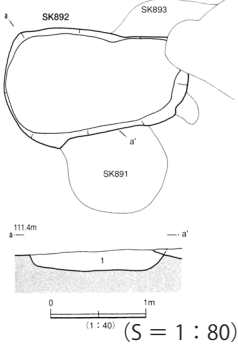
SK792 土壙



SK792 出土遺物



SK892 土壙



SK892 出土遺物

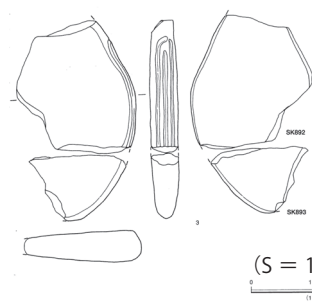


図6 高瀬山遺跡の中・小型住居跡と墓壙 (齊藤ほか 2004)

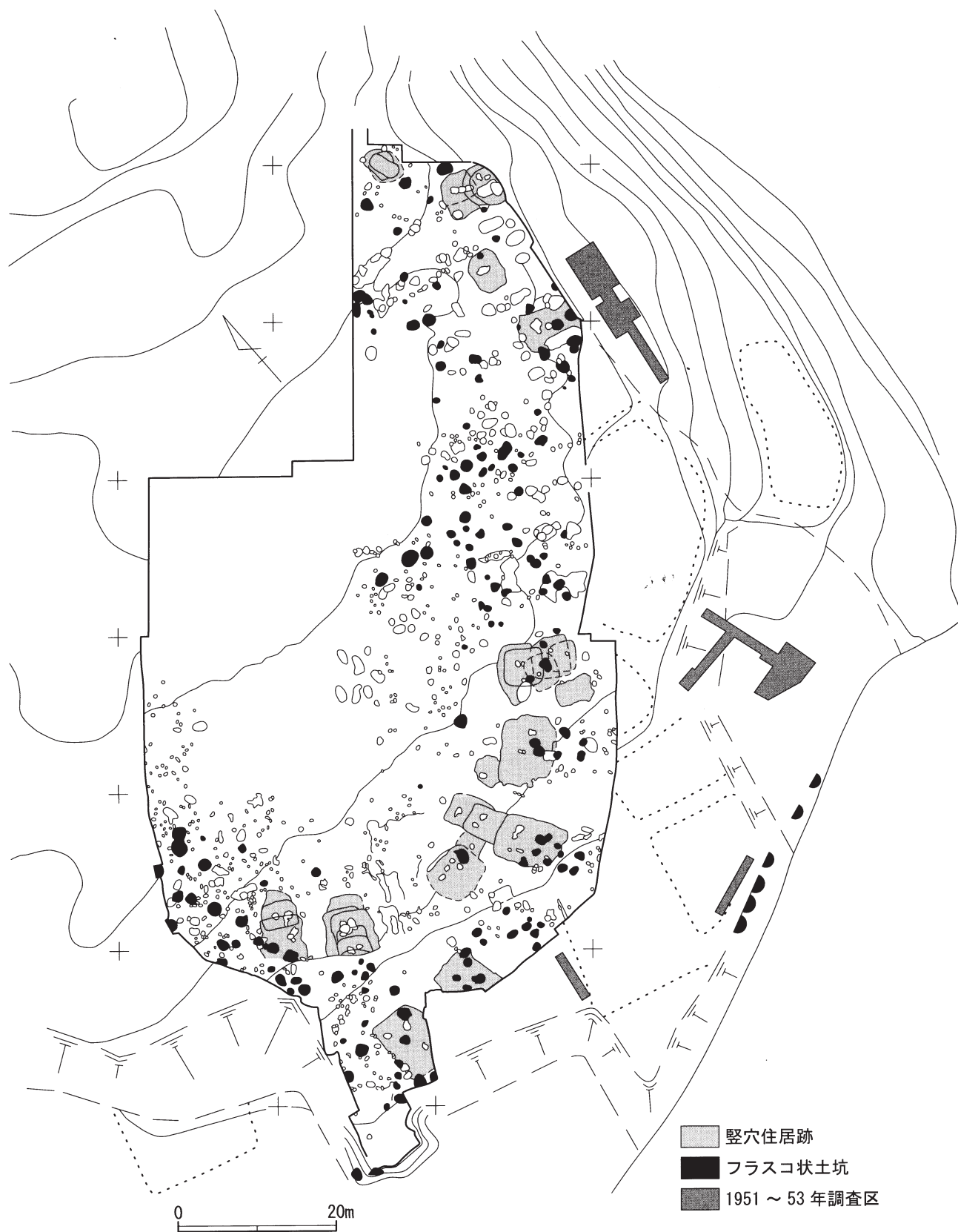
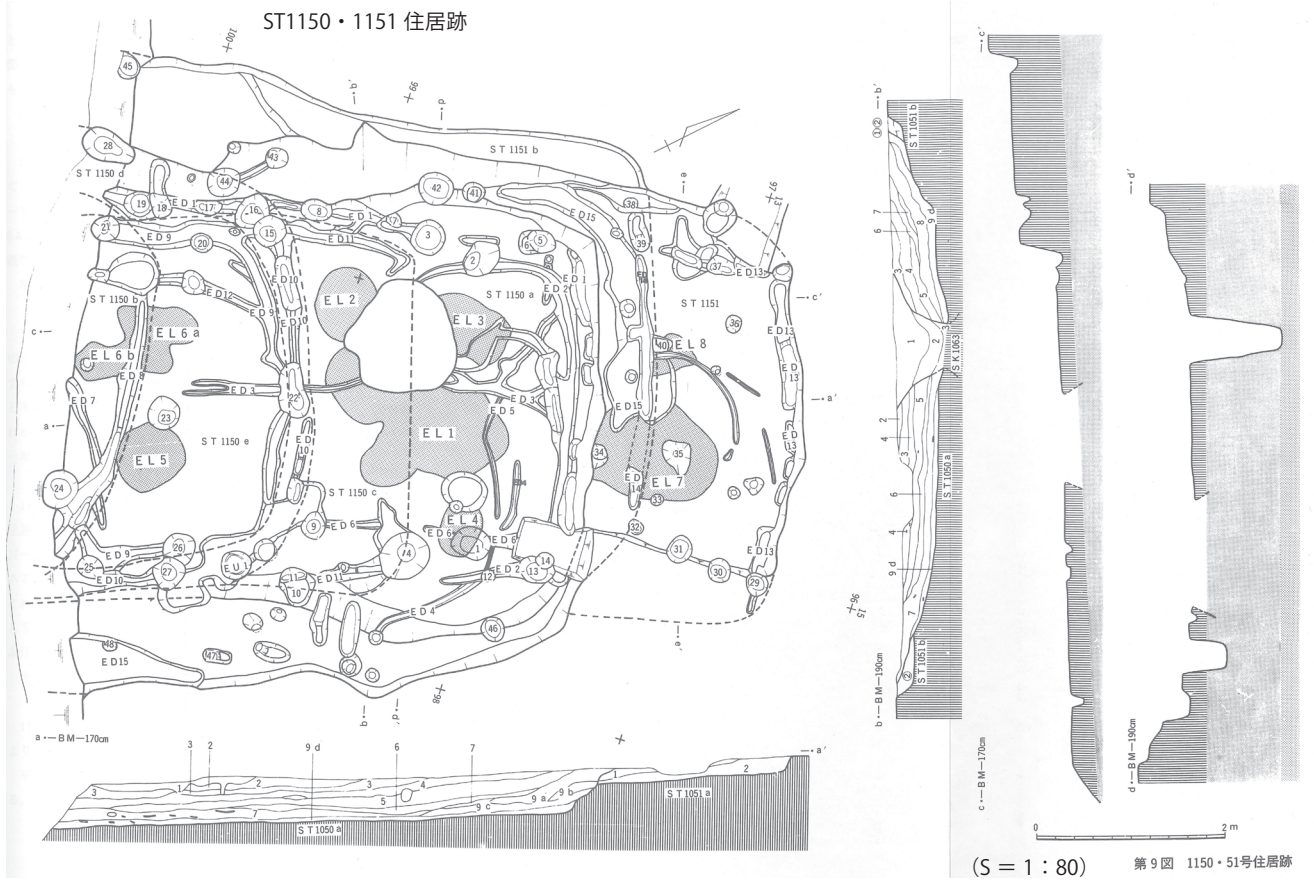


図7 遊佐町吹浦遺跡遺構配置図 (佐藤ほか 2009)

ST1150・1151 住居跡



(S = 1 : 80) 第9図 1150・51号住居跡

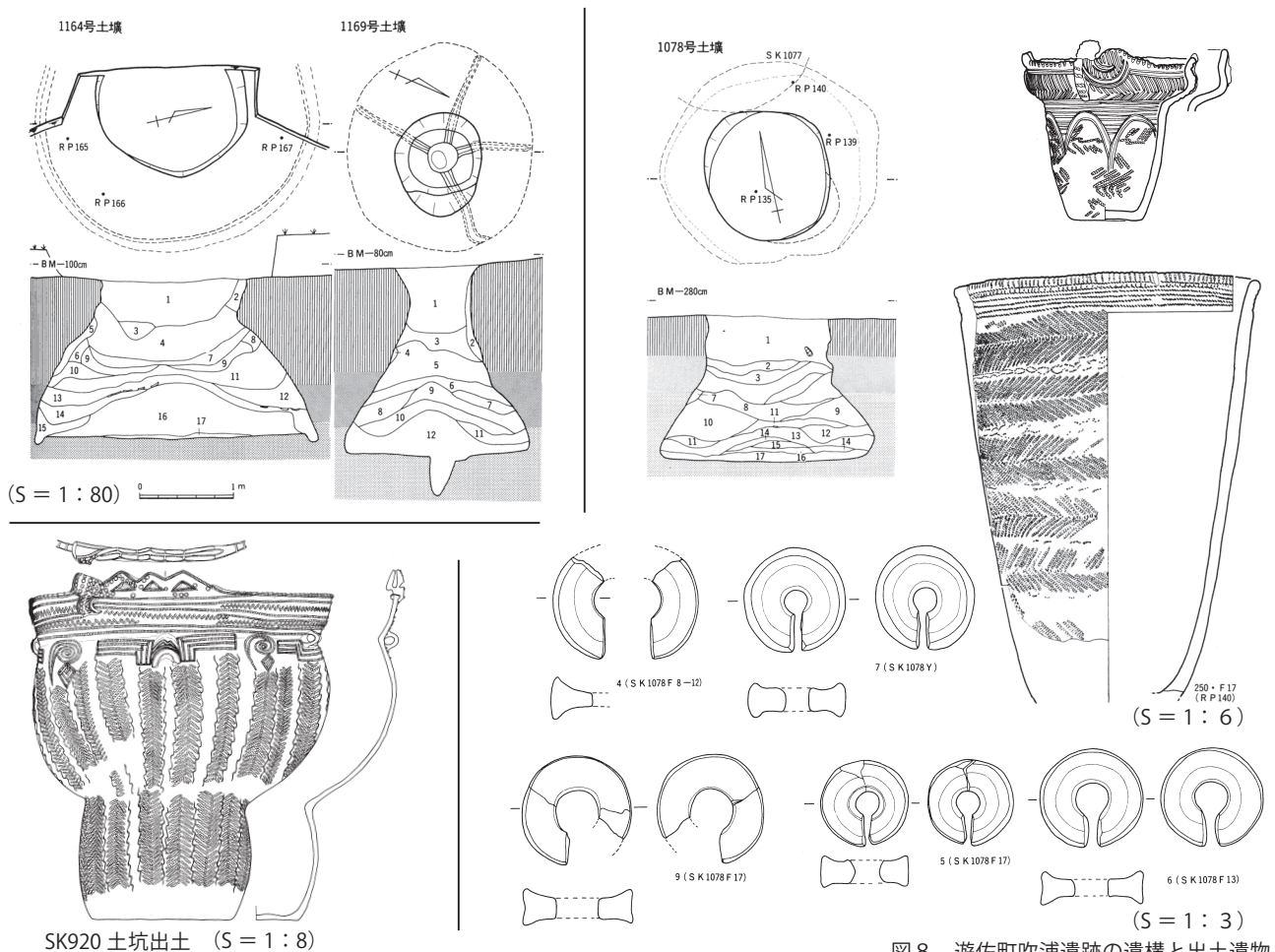


図8 遊佐町吹浦遺跡の遺構と出土遺物

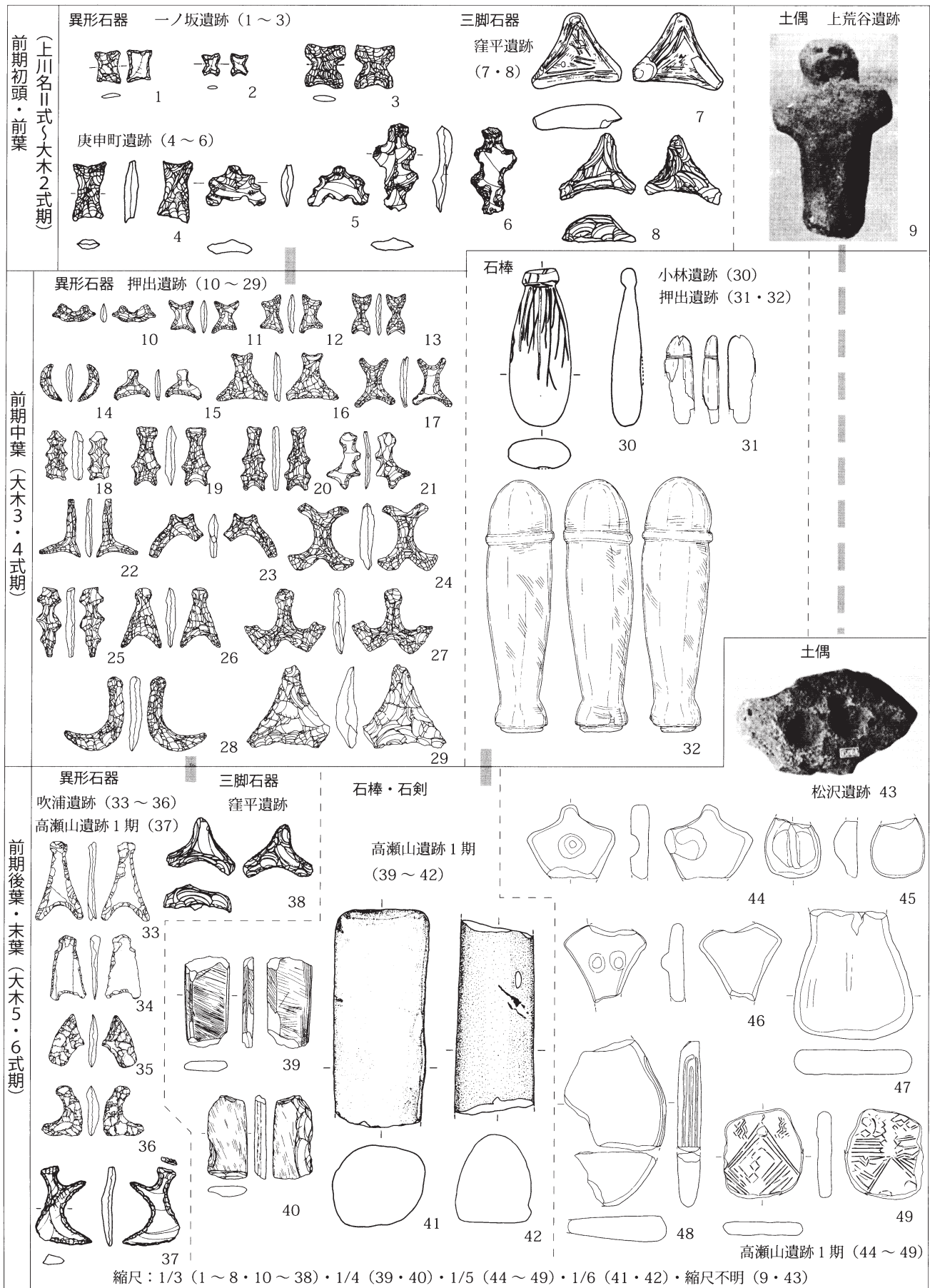


図9 山形県内の縄文時代前期の祭祀具 (菅原 2009)

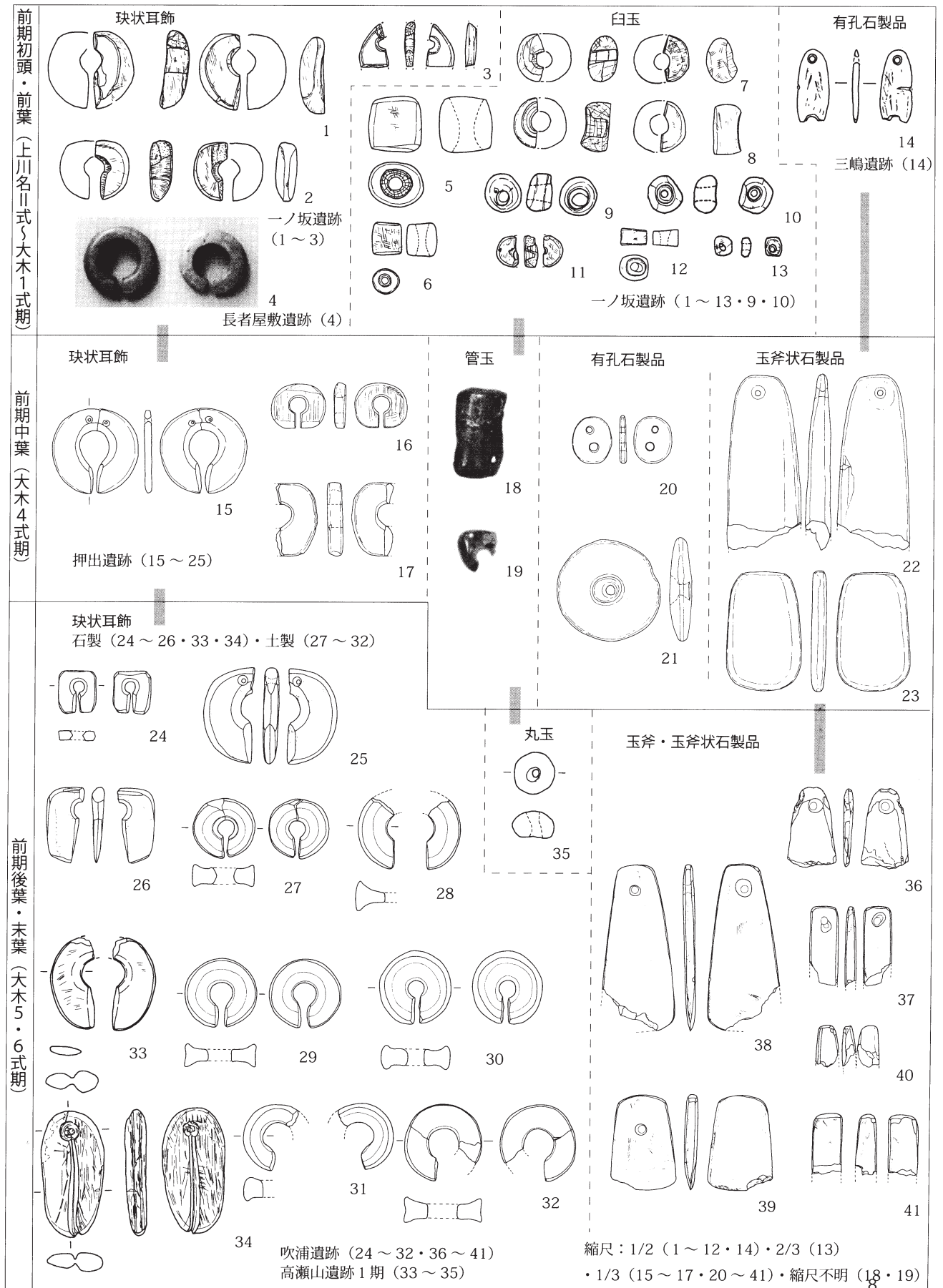


図10 山形県内の縄文時代前期の装身具 (菅原 2009)

## 山形県内の縄文時代前期後半の集落とくらし



山形県埋蔵文化財センター 菅原哲文

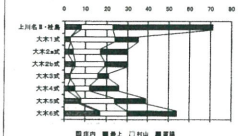
## 山形の縄文前期の集落の特徴

- ・ 県内の縄文前期の集落数は、前期初めから前期の中頃にかけて減少し、前期末になると再び増加する。
- ・ 早期では規模の大きな集落は見られず、住居規模も小型
- 前期になると10mを超える大型住居が出現し、集落規模も拡大
- ・ 前期前半では少数の大型住居に中・小型の住居が主となる構成であるが、前期末になると大型住居を主体とする構成に変わる。

**表1 縄文時代前期の遺跡数**

期	山内	東七	村山	置賜	合計
上川巻土器期	6	2	15	48	71
大木4式	2	6	21	11	38
大木5・6式	3	7	12	12	38
大木6式	4	1	14	11	30
大木7式	2	6	13	9	30
大木8式	2	3	7	14	26
大木9式	2	1	10	15	28
大木10式	10	1	15	25	51

**表2 縄文時代前期遺跡数の推移**



## 大型住居跡の性格の変化

- ・ 前期前半
  - 大量に石器未製品が出土した米沢市一ノ坂遺跡のように、工房跡などに利用されていた場合がある。
  - 集落の中での棟数が少ない。共用施設などの性格が強い？
- ↓
- ・ 前期後半（大木5・6式期）
  - 複数の大型住居が一集落で確認される。大型の居住施設として普遍的な建物になってくる。

## 前期後半の主な集落跡

- ・ 高島町押出遺跡（大木4式期）
- ・ 寒河江市高瀬山遺跡（大木5・6式期）
- ・ 遊佐町吹浦遺跡（大木5・6式期）
- ・ 鶴岡市川内袋遺跡（前期後葉～未葉頃が中心が）
- ・ 酒田市飛鳥 船見沢遺跡・蕨山遺跡（大木6式～中期前半）




## 山形の縄文前期後半の集落の特徴

- ・ 大木4式期
  - 県内では集落の構成が明らかになった事例が少ない
  - 高島町押出遺跡が数少ない事例。特殊な立地と性格
- ・ 大木5・6式期
  - 集落数の増加・縄文中期にみられるような大規模環状構成の出現
  - 寒河江市高瀬山遺跡・遊佐町吹浦遺跡



## 高島町押出遺跡の調査経緯

- ・ 昭和46年 佐藤鎮雄氏により遺跡が発見される。
- ・ 昭和60～62年 国道13号線米沢南陽道道路建設による山形県教育委員会による1～3次調査。4000㎡。
- ・ 平成23・24年 国営かんがい排水事業による山形県埋蔵文化財センターの調査、4・5次1795㎡
- ・ 平成27年 東北中央自動車道に関連する事業による山形県埋蔵文化財センターの調査、6次101㎡

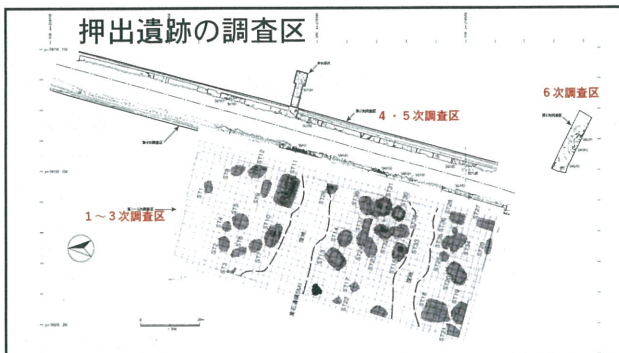


### 押出遺跡の概要

- ・高島町深沼に所在。吉野川の自然堤防下の泥炭地縁辺部に立地。
  - ・地表下約2mで確認された低湿地遺跡。打ち込み柱による平地式住居を主とする集落か。
  - ・通常では残らない木製品や漆製品、植物質の遺物や食料となった種子などが大量に出土。
- ↓
- ・特殊な立地環境と特異な出土遺物
  - 一般的に見られる集落跡とは様相を異にする。

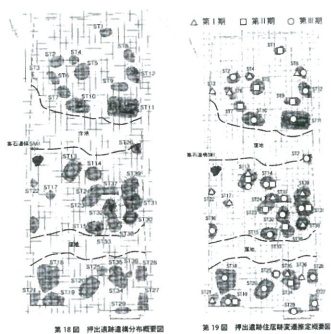


### 押出遺跡の調査区



### 集落の特徴

- ・1～3次調査で39基、4・5次調査では4基、6次元調査で3基が確認。
- ・2か所の窪地を挟んで3群の住居群が分布する。
- ・比較的大型の建物と、小型の簡略な建物が各群に存在する。
- ・低湿地に対応するための工夫(根太)



注：住居跡ではないという見解があるが、居住していた集落であるという前提で

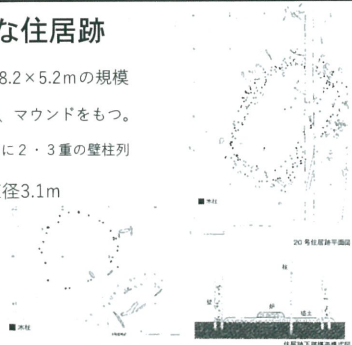
### 押出遺跡の主な住居跡

- ・11号住居跡 転ばし根太、厚さ60cmのマウンドを備える。
- ・平面形は長方形、規模11.5×6.8mの大型住居。炉跡は認められず。
- ・外側に壁柱と思われる杭が多重にめぐる。主柱や副柱と思われる柱もあり。



### 押出遺跡の主な住居跡

- ・20号住居跡 楕円形 8.2×5.2mの規模
- ・転ばし根太は伴わないが、マウンドをもつ。
- ・中央に3本の主柱と、周囲に2・3重の壁柱列
- ・4号住居跡 円形 直径3.1m
- ・円形の柱列だけの簡素な構造。マウンドや転ばし根太はない。



### 押出遺跡の住居跡



・20号住居跡

・4号住居跡



### 彩漆土器

- ・赤漆と黒漆による渦巻状文様
- ・関東の諸磯b式土器に相当する。
- ・押出遺跡に特に出土が多い。同じ器形の土器は、川内袋遺跡などでも出土。
- ・用途などは不明。威信財的なものか。



### 押出遺跡の石製祭祀具

#### ・異形石器

1～3次調査で32点出土

他の地域と比較して数量の多さ、バリエーションが多い。

鉄石英など、赤色系の石材を多く使用。

人体を模していると思われる形態のものもあり。



### 押出遺跡の石製祭祀具

- ・小型の石棒が3点出土。三脚石器と思われる遺物が出土しているが少量。

- ・岩版が1点出土。

・前期の石棒は、東根市小林遺跡で、小型の太木<sup>2</sup>～3式頃と思われるものが出土している。

・出土量は少ない。石棒による祭りはまだ盛んではなかった?



### 押出遺跡の石製装身具

- ・玦状耳飾
- ・玉類（丸玉・管玉）
- ・斧状石製品

玉はコハクで作られているものがある

耳飾の石材は流紋岩・黒曜石・ネフライト（軟玉）など

斧状石製品は蛇紋岩製か



### 押出遺跡で食料になったもの

#### ・動物性の食料

哺乳類—シカ・イノシシ・鳥類（種類不明）

魚類—ウグイ属（ハヤ）・サケ科（サケやサクラマスの可能性）

貝類—マルタニシ

漁撈具として、鹿角製ヤスが出土。



### 押出遺跡の植物質食料

・クルミ（1～3次調査で80箱出土・最も多い）、クリ

・カヤ、ヒメビシ、オニバス、コウホネ  
・ニワトコ、ヤマボウシ、ブドウ属、ヤマブドウ、ヤマモモ


・アズキ亜種、カラズザンショウ、ジュンサイ、エゴマ、シソ属

※縄文時代の豆類の利用が近年注目されている。

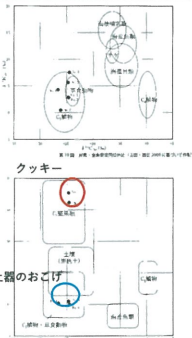


### 加工食品-クッキー状炭化物

直径4~7cm、表面に渦巻状の文様  
日持ちする食料・携帯用や保存食？



クッキー



土器のおこげ

獣肉などが入っていた可能性も言及されていたが、「炭素・窒素安定同位体分析」により主成分は堅果類であることが判明した。

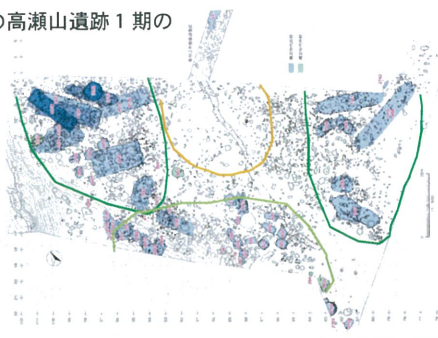
### 前期後・末葉の高瀬山遺跡 1 期の集落跡

・ 寒河江市高瀬山に所在。最上川の段丘上

・ 中央部に広場

・ 土坑群

・ 大型住居群と中小型の住居群




縄文中期でみられる集落構成

### 検出された大型住居跡

大型住居跡は合計12棟確認された  
最大の住居跡は長さ27.5m


・ ST1341 竪穴住居跡 (大木 6 式)

全長23.5m、幅5.5m、面積103.6㎡  
主柱穴12基、主要な炉跡 5 基  
中心に複数の炉が並列する。  
柱穴は 2 基ずつ 5 対の配置。



### 検出された大型住居跡

・ ST1341 (大木 6 式)



### 出土した縄文土器

・ ST1341出土土器 (大木 6 式土器)  
県内の前期末に主に作られている土器



### 他地域からの土器

中部地方、北陸、関東地方の土器が少量ながらも出土している。



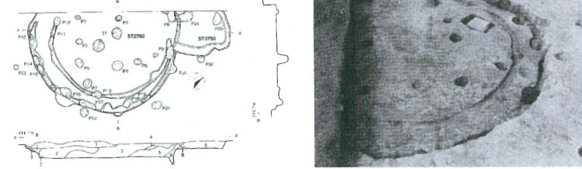
### 中型・小型の住居跡

中・小型の住居跡では炉跡を備えるのは少数である。

・ ST2760 (大木 6 式)

・ 規模4.5m

・ 主柱穴と壁柱穴あり、2か所の地床炉を検出

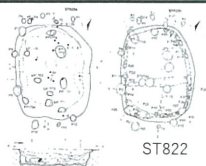


### 中型・小型の住居跡

• 壁柱穴あり、支柱穴や炉跡はない  
住まいとしての建物と考えるよりも、別の用途も検討すべきか。

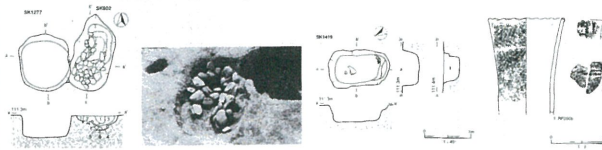
- ST822 (大木6式) 規模3.88m×3m
- ST832 (大木6式) 規模4.92m×2.1m

ST832



### 高瀬山遺跡の墓壙

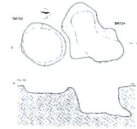
- 主に小判形のものが多いが、円形のものもある。十数基が検出
- 長さは1~2m、幅0.6~1.2m、深さは20~80cm
- 遺物が出土するもの、しないものがある。石器・土器など。



### 高瀬山遺跡の墓壙

• 遺物は石器類が多い。土偶が出土しているものもある。

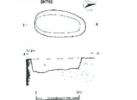
SK725



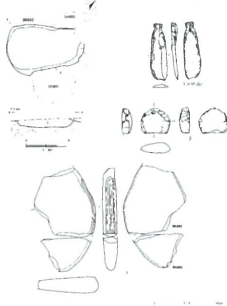
SK742



SK785

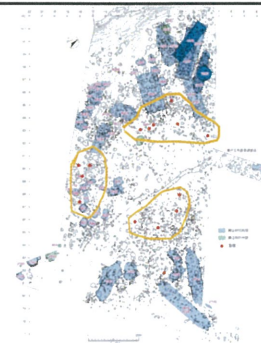


SK892



### 墓壙の分布

- 住居群の分布する内側から広場の外側の場所に分布する。中期の墓の分布と類似する
- 三か所程の分布のまとまりがある。
- 中・小型住居の分布に一部がさなる。
- 埋設土器によるお墓もあるものと思われるがはっきりしない。



### 高瀬山遺跡の土坑

- 住居群の分布と一部重複しつつ、その内側に環状に分布している。
- 直径は約1~2mの規模。貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が多く認められる。



### 高瀬山遺跡の装身具

- 塊状耳飾  
縦長になる形態の物が多い。  
ここでは緑色系の石材は利用していない。
- 丸玉  
硬質の石材を使用している。



### 高瀬山遺跡の祭祀具

・土偶

県内の縄文前期の遺跡では、あまり定着していなかった。県内最古の土偶は前期初め頃に確認されている。

複数個体が出土しているのは、高瀬山遺跡に限られる。

板状で、頭部、腕の表現あり。顔や脚の表現は未発達。



土偶の定着は、集落の大規模化、安定化、他地域との交流に関連するものか。



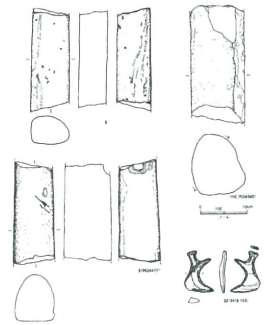
### 高瀬山遺跡出土の石製祭祀具

・石棒 残存長直径10cm、長さ25cmを超える大型品が主

↓  
縄文中期の大型石棒に発展してゆく。

・石剣 石を扁平に加工している。

・少量ながら異形石器も出土している。



### 遊佐町吹浦遺跡

・遊佐町吹浦、月光川の河口に立地

・前期の大木5・6式期の地域の中心的な集落跡

・学史的に古くから調査されてきた遺跡、大正8年に発見。

・昭和26年(1951)～28年(1953)に4次にわたる調査

・昭和58年(1983)～61年(1986)に山形県による4次にわたる調査



### 吹浦遺跡の集落

山形県教委による調査

住居跡は合計48棟、土壇334基が確認された。

住居跡は全体として半環状に分布する

中央に広場と思われる遺構が希薄な空間、その周囲にフラスコ状土坑、さらに外側に住居群が分布する。



### 吹浦遺跡の住居群

・同じ場所に何度も重複して建てられている。13か所の群になる。

・1～数基の地床炉をもつ。

・住居は3種類の規模がある事が指摘されている。

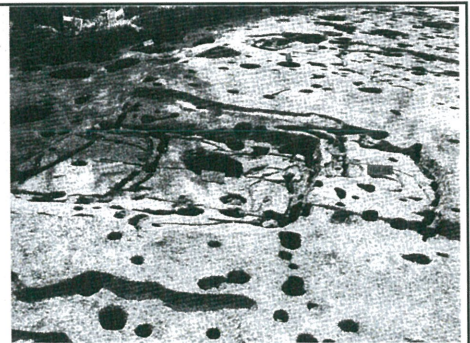
・長軸3.5～4m、短軸3～4m、床面積15㎡

・長軸4.5～5.5m、短軸4～4.5m、床面積20㎡

・長軸6～7m、短軸4.5～5.5m、床面積30㎡

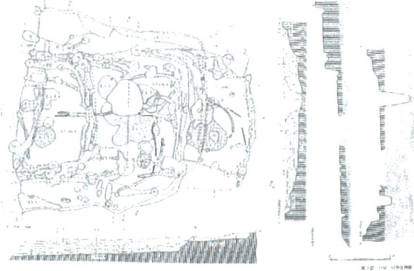


### ST1150・1151 竪穴住居跡



### ST1150・1151竪穴住居跡

- ・ 方形や長方形の住居跡
- ・ 10回の建て替えが認められる
- ・ 1～数基の地床炉を備える。



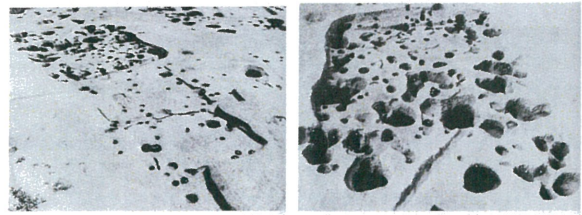
### ST1185・1186竪穴住居跡

ST1186住居跡（手前）・ST1185住居跡（奥）

- ・ 方形の住居跡が少しずつ場所を変えて建て替えられている。


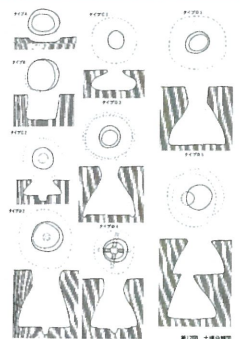
### ST1185住居跡

- ・ 同じ所に重複して7棟以上が建て替えられていた。



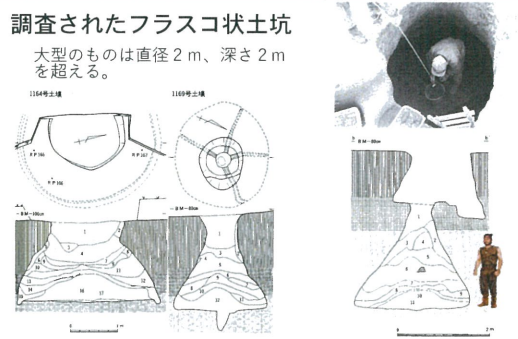
### 吹浦遺跡の土坑群

- ・ フラスコ状土坑-堅果類や根菜類の貯蔵施設と考えられる。
- ・ 吹浦遺跡は、他の遺跡よりも大型のフラスコ状土坑が多い。

### 調査されたフラスコ状土坑

大型のものは直径2m、深さ2mを超える。



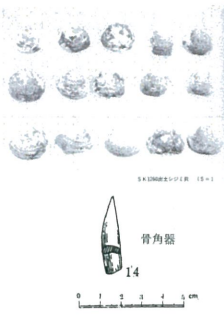
### 吹浦遺跡の動物遺体

食料として持ち込まれ、廃棄された獣骨や貝類が出土している。

1955年の報告書によれば、ヤマトシジミを主体とする小貝塚が6か所確認された。

爬虫類（イシガメ）・鳥類（サギ科）・哺乳類（イノシシ・シカ・クジラ類）  
貝類（12種類が出土、多くはヤマトシジミ）


（魚骨等の出土が報告されていないが、採集方法や残り具合によるものと思われる）



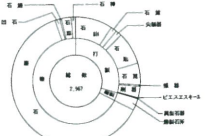
### 吹浦遺跡の植物遺体

- ・ 植物遺体の種類
- オニグルミ・クリ（種子）
- ケヤキ・コナラ・シナの木の種類（木材）
- ・ 貯蔵施設であるフラスコ状土坑が多い、また堅果類の加工用具である磨石類が多く占める。

炭化したクリ



吹浦遺跡石器組成グラフ  
磨石が約60%を占める。



### 吹浦遺跡の装身具

・ 玦状耳飾

石製のものと土製のものがある。土製のものは赤彩される。



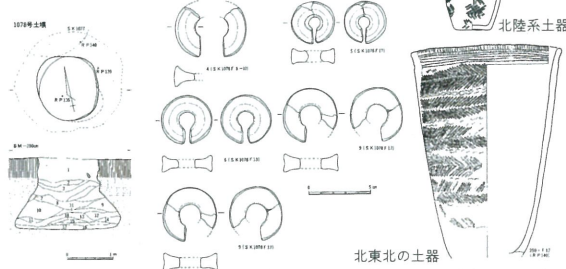
・ 斧状石製品

孔をあけてつるすペンダント状のもの  
石材は白色や緑色系統の石  
蛇紋岩か一日本海側を通じたルート



### お墓の可能性のある土坑

・ 玦状耳飾りがまとまって出土



### 祭祀具一石棒

・ 異形石器



残存長21cm・大型の石棒

円筒形の石棒として用いられたと思われる棒状の礫を含めると26点出土している。

土偶の出土は認められない。地域差が。

押出遺跡に比べて出土点数はかなり少ない。

使用石材には赤い鉄石英も認められる。



### 鶴岡市川内袋遺跡

・ 新潟の県境に近い鶴岡市（旧温海町）五十川に位置する。

・ 五十川下流、日本海まで500mと近い。

・ 早期末から、前期末の土器が出土。集落の主な時期は前期後葉か。

・ 大型住居跡と中小型の住居跡が検出。住居跡は全部で7棟。他に土坑や陥穴がある。



### 川内袋遺跡の遺構分布

- ・ 住居群
- ・ 土坑群



### 川内袋遺跡ST500大型住居跡

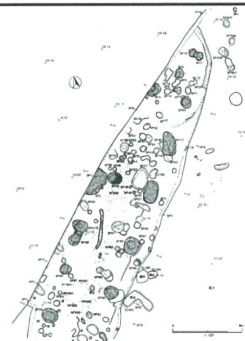
・ 楕円形で長軸30m以上、幅約8mの大型住居。県内でも最大級。

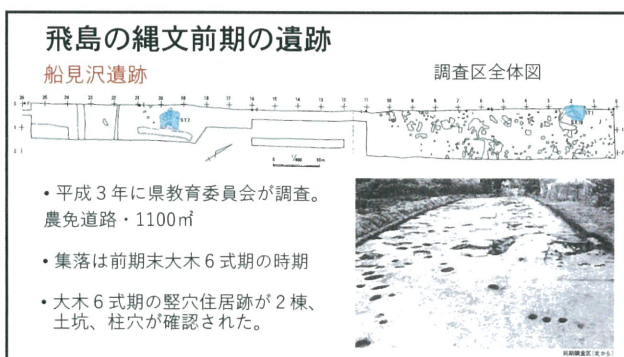
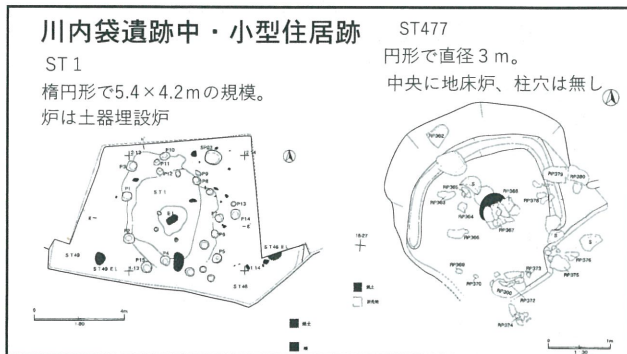
・ 床面が3、4面認められ、建て替えや拡張に関係するものか。

・ 中央に地床炉が並ぶ。

・ 2基一對の柱穴が7対ほど認められる。配置は縄文中期的。

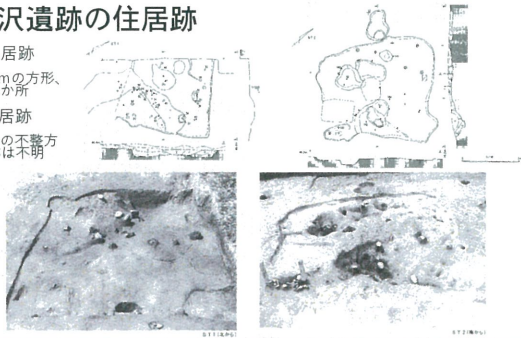
・ 埋設土器が8基確認。地床炉に埋設されたものもあり。





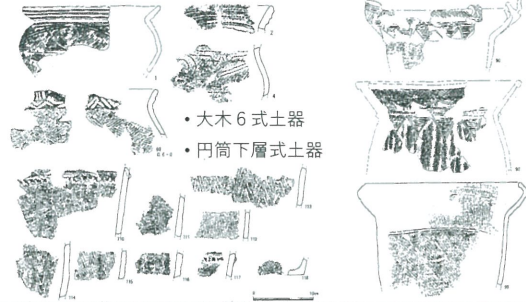
### 船見沢遺跡の住居跡

- ST1住居跡  
3.5×2.8mの方形、  
地床炉2か所
- ST2住居跡  
4×3.5mの不整形方  
形、炉跡は不明



### 船見沢遺跡の縄文土器

• 朝日下層式土器



### 飛島の蕨山遺跡

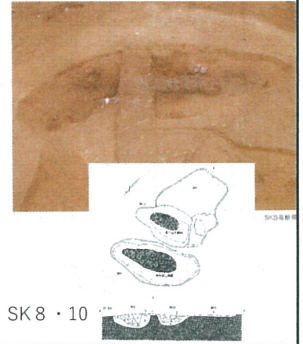
- 前期初頭（上川名II式）、大木1・6式、  
中期前半の遺物が出土している。
- 2棟の竪穴住居跡が検出（時期は不詳）



• 出土土器には、北陸から由来するもの、北東北に由来するものがある。

### 出土した獣骨

- 7基の土坑からはアシカ・トドと  
思われる獣骨が出土した。
- 縄文時代の人々に持ち込まれ、食  
料にされたもの。
- 骨はかなり熱を受けており、意図  
的に骨を焼いた状態を示していた。



• 儀礼的な意図で骨を焼いた？  
8・10号土坑

### 日本海沿岸遺跡の黒曜石産地分析

バリノ・サーヴェイ株式会社による単光X線分析、吹浦・船見沢・蕨山遺跡の黒曜石製石器

- 新潟県新発田市板山、あるいは信州産と推定された。
- 船見沢、蕨山遺跡の資料は信州産と推定される。
- 日本海側のルートで人や交易品のやりとり（舟の利用）



### 山形県内の縄文時代前期後半の集落とくらし（まとめ）

#### • 集落の特色

前期末にかけて遺跡数の増加・集落規模の拡大  
大型住居跡を複数配置する、環状を意識した集落の構成

環状構成は中期のように整然としていないが、高瀬山遺跡では広場、墓、土坑、住居群を環状に配置

• 食料 押出遺跡の調査により、食料として利用していた動植物の内容や、新しい分析方法で縄文人の食性がより明らかになってきた。

• 祭祀 前期後・末葉になると、石棒・石刻による祭祀が急に発達する。土偶はあまり浸透していないが、高瀬山遺跡でよく取り入れられている。

• 交流 石材や土器の分析で、地域外との交易・交流がさかんに行われていた。